# 勇者は勇者に憧れる

もやし部

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

# あらすじ

鷲尾須美　結城友奈は勇者であるを参考にしたオリ主創作物です。

# 目次

プロローグ ―― 1
きっかけ ―― 8

# プロローグ

桜の花びらが散り、山道に鮮やかに模様を付ける。木々の隙間から陽が差し込み、落ちた枝を踏みしめる音と少し前を歩く彼女の鼻歌が聞こえる。

昔と変わらない距離感を変えたくて。文章力のない頭で考えた言葉を頭の中で復唱する。

歩き慣れた道なのに喉が乾き、背中に汗が滲む。違う山を歩いているような錯覚さえ感じる。

もう一度頭の中で言葉を復唱し、彼女の名前を呼ぶ。

鼻歌が止まると彼女は振り返り何時ものように人懐こい笑顔を浮かべ尋ね返す。

訪れる沈黙、鳴り止まない心臓の動悸に急かされているような。

大きく息を吸い込み散々確認した言葉をゆっくりと吐き出した。

カーテンの隙間から溢れる朝日に寝返りをうつ。
後もう一眠りしよう。掛け布団を掴み太陽の光を遮るように布団を被る。再び訪れた暗闇にどんどんまどろんでいくと、

ーーとたとた

不意に聞こえる階段を駆け上がる音に落ちかけた意識が急速に覚めていく。慌てて布団から跳び起き、ドアの鍵を締める。
ーーコンコン
ノックとともに
友奈「優君起きてる？　入るよ？」
聞こえてくる幼馴染の声に
優「ちょっちょっと待ってっ！」

朝から冷や汗をかきながら自分の出せる最高速で着替えを済ませた。

優「友奈お願いだから起こしに部屋に入ろうとするのだけは止めてよ。」
山道をゆっくり歩きながら、少し前を歩く幼馴染に懇願する。
友奈「駄目かな？ちょっと前までは部屋に入れてくれたよ？」
友奈は不思議そうな顔をして見つめ返す。
優「友奈だって自分の部屋に入られるのは嫌でしょ？」
友奈「私は、優君が部屋に入るの別に気にしないよ？」

さも当然のようにかえす幼馴染に思わず溜息をつく。
彼女、結城友奈は家が2つ隣と近所であったことから昔から何をやるのも一緒だった。具体的に何時からかは覚えていない。何時の間にか幼馴染から好きな女の子と自分の認識が変わっていた。

ただ、友奈は自分を唯の幼馴染としかみてないのだろう。
友奈の言動からまず異性として見られていないので、異性として見てもらうにはどうすればいいか四苦八苦する有様で…
友奈はそんなこと知る由もなく道すがら気に入った花を摘んでは、押し花にすべく古びた本に挟んで行く。
友奈は趣味である押し花集めに決まって僕を誘う。押し花という僕らの歳では珍しい趣味であることや友奈自身が自分のしたい事をあまり口に出さないという性格をしているというのが理由だろう。
僕自身、友奈がわがままを言うことを長く付き合っていてほとんど見たことがなく常に彼女は自分より周りを優先して行動している。何より我慢してでなく、本心から自分より他人を優先して行動する友奈に僕は憧れのようなものを持っていた。
そんな性格の友奈がする僅かなわがままなようなものを叶えてあげたいと思うしむしろ頼られていることを嬉しく思う。
そしてなにより押し花集めという男子に無縁な趣味でも喜んで付き合えるのにはもう一つ理由がある。

友奈「じゃじゃーんっ。」
友奈が効果音を自分で出しながら重箱を開ける。
優「待ってましたー。」
重箱の中にはたくさんのおかずとおにぎり。ただそのどれもが形が綺麗にできているものとほんの少し歪なものがあって僕は迷わず少し歪なほうを選んで食べる。
「…どうかな?」
少し不安そうに尋ねる友奈に、
「美味しいよ。形も前より綺麗になってる。」
「よかったー。次はもっと上手く作るから楽しみにしててね。」
友奈はほっとした様子で嬉しそうに笑う。
僕にとっても友奈の手料理を食べられるし、こうして嬉しそうに笑う友奈の様子を見られるのも凄く嬉しくて、押し花集めに付き合うのは苦にならない。

友奈が満足するだけの押し花も集まり、とりとめのない話をしながら帰路につく。
友奈「イネスっていうショッピングモールでねっ…」

ーーブーンブーンブーン
会話を遮るようにポケットの端末が鳴る。ひやりと嫌な汗が流れ友奈を見る。
友奈「携帯鳴ってるよ？」
ほっと胸を撫で下ろし端末を見る。
ーーーーーーーーーーーーーーー
差出人　鷲尾須美
件名　　連絡
今日は１６時に神樹館の前に集合です。
くれぐれも遅刻しないでください。
ーーーーーーーーーーーーーーー
友奈「優君恐い顔してたけど何かあったの？」
心配そうに僕の様子を伺う友奈に
優「大丈夫。なんでもないから。」
笑ってなかったように誤魔化すと少し腑に落ちない様子ではあったけど引き下がってくれた。

さっきまでの楽しい気分ははじめからなかったように、心の中は、一抹の不安と僅かな安堵でいっぱいだった。

# きっかけ

優「友奈、また明日」
友奈「うん　　…またね」
いつもの快活な友奈らしくない歯切れの悪い応答。
さっきのことが気になるのだろう。様子がおかしい原因はわかっていても僕には何もできない。
友奈だけには教えるわけにはいかないのだから…
彼女が家に入っていくのを確認しそのまま神樹館へと足を運ぶ。

神樹館、僕たちの済む四国地方の生活を守ってくれている土着神である神樹様からとった小学校。格式高く通う生徒も神樹様を代々守護したりなんらかの役割を持ってきた名家ばかりの特殊な学校らしい。
休日ということもあり学内は閑散としている。そんな中警備員さんが巡回しているあたり普通の小学校らしさは感じられなかった。
巡回中の警備員さんの視線がこっちを見ていることに気づき、反射的に会釈をす

る。生徒だと思ったのか特に警戒する様子もなく警備員さんは巡回を再開する。呼び出した張本人である須美達を探してあたりをキョロキョロとしていると、

「ゆうゆう～　こっちだよ～。」

のんびりとした呼び声のした方向をむくとベンチに二人の女の子が腰を掛けて待っていた。

優「やあ早いね　園子、須美」

園子「ゆうゆう　今日も元気そうだね～。」

のんびりとしたペースの乃木園子と、

須美「優も時間にはまだ余裕がありますよ。」

そう言って上品に笑う鷲尾須美。

優「用事がさっき終わったばかりだったから。」

　すると須美は膝にのせていたポーチから

須美「…もしお腹が空いてするなら食べますか？」

おずおずとおにぎりを差し出す。

ちょうど小腹が空いてたこともあり願ってもない。

優「ありがとう。」

お礼を言っておにぎりを受け取ると
須美「いっ　言っておきますが、別に他意はありませんから。」
園子「わっしーっ甲斐甲斐しいね～」
楽しそうに園子が笑う。
須美「べっ別に…」
須美がそっぽを向く。

「ごめーん」
遠くから走ってくる女の子、三ノ輪銀に3人の視線が集まる。
須美「またですか…」
園子「みのさ～ん」
優「銀は相変わらず忙しそうだね。」
銀はベンチの前に座り込み息を整える。
須美が取り出した水筒とおにぎりを銀に渡し、園子はにこにことその様子を見守る。
僕が、この3人と関わりを持ってずいぶんと経つ。

「出雲優君には勇者の素質があります。」

はじまりは突然だった。ある日何にも知らない僕の前に、突然大社の遣いが現れた。

今の僕たちの生活には神樹様に守られており、日本の、ほとんどが未知のウイルスで死んだとされ四国だけはそのおかげで生活ができるということ。しかし一般の人々には知らされていないがバーテックスというウイルスが神樹様を狙って外からやってきていたらしい。神樹様に接触すると四国は滅んでしまうらしく、大社より選ばれた勇者が退けてきたらしい。

勇者とは大社を代々支えてきた家系から適正のある女の子が選出され、この3人、乃木家、鷲尾家、三ノ輪家は中でも有力者であるということ。一応出雲家も微力ながら支えてきた家系の一つにあたる。

しかし勇者の適正とは受け継がれるものではなく、代々支えてきた家系でも適正がない場合も多く年々人材の不足が深刻化してきた。そこで大社は選出の全体に広げるとともに子供達の適正を調べあげたところ、過去前例のない男でありながら適正値の

高い僕が見つかった。
大社からしたら男でも勇者になることができる理由がわかれば人材不足の解消、かつバーテックス等のあまり知られたくない秘密を小さい範囲で留めることのできる可能性もあるという理由から勧誘にきたとのことだった。
とは言ってもいきなりそんな話をされてはいやりますとは言えるはずもなくまだまだ説明することも多いということから返事は保留にしてもらった。
それから数日後大社の遣いが再び説明にきた。以前はまだまだ説明することが多いといったわりに別段変わりのない説明をする。
何しにきたのだろう。そんな疑念を持ちながら説明を聞いていると大社の人が一枚の資料を机の上に置いた。
その紙切れ1枚に僕は頭を思いきりぶん殴られるような衝撃を受けた。

候補者リスト　備考
ーーーーー　ーーー
結城友奈　適正最高値記録　候補1
ーーーーー　ーーー

遣「失礼お見せする書類を間違えました。」
大社の遣いは何事もなかったかのように、書類をしまう。
優「今のは…？」
話の流れから今の書類がなんであるか検討はつく。
それでも尋ねずにはいられなかった。間違いであって欲しい。なんとか平静を装い問う。
遣「お察しの通りです。勇者をやっていただけませんか？」
書類を間違えたのがわざとなのかわからない。それでも遣いの行動、言動が酷く悪意的なものにしか感じられない。
それでも…

優「わかりました…。お役目受けさせていただきます。」
自分が辞退するつまり、友奈に役目がまわる。
友奈ならどれだけ危険でも快く引き受けるのだろう。
やるしかない…
こうして僕は勇者になった。